

演題 5. 特異な臨床経過をたどった口底癌の一例について

○古川 康憲, 宮手 浩樹, 中村弥栄子  
横田 光正, 石川 義人, 大屋 高德  
工藤 啓吾

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

今回われわれは、特異な経過をたどった口底癌 (T<sub>4</sub>N<sub>2</sub>cM<sub>0</sub>) の一例を経験し、その臨床症状の概要を報告した。患者は 55 才の男性で<sup>60</sup>Co 40 Gy の照射、CDDP 100 mg, BLM/30 mg の投与を他院で受けた後、当科にて両側頸部郭清、腫瘍切除、大胸筋皮弁による即時再建などを行った。手術時間 16 時間、出血量は 1940 g だった。術後 2 週間頃より、全身に発疹、ピランを生じた。39°C を越える発熱もみられたため、抗生物質やヒト免疫グロブリンの大量投与を行ったが解熱はされなかった。同時期の胸部 X 線写真所見に異常はなく血液培養は陰性であった。術後 3 週間頃より、白血球や血小板の著しい減少と、GOT, GPT, γ-GTP の著しい上昇を認めた。DIC を発症し、また肝、腎、呼吸器不全などの多臓器不全となり、術後 33 日目に死亡した。

演題 6. 岩手医科大学歯学部附属病院障害者歯科診療センターにおける患者動向

○菊地 和子, 柏崎 泰, 渡辺 徹  
遠藤 千恵, 坂本 望, 佐藤 健一  
佐藤 雅仁, 久慈 昭慶, 新妻 克之  
甫坂 隆太, 荒川 二郎, 丹呉 卓史  
小田 真悟, 菊池 紫織, 城 茂治

岩手医科大学歯学部附属病院  
障害者歯科診療センター

岩手医科大学歯学部附属病院障害者歯科診療センターは、平成 7 年 9 月 8 日に開設され、岩手県、岩手県歯科医師会、大学の協体制のもと、複数科の歯科医師と専属の歯科衛生士 2 名、看護婦 1 名により運営されている。

今回我々は、今後当センターがどのように社会の要望にこたえ、障害者歯科医療を充実していけるかを模索するため、平成 8 年 9 月 7 日までの開設後一年間に受診した患者の臨床統計的検討を行なったので、若干

の考察を加えて報告した。

障害者歯科診療センター開設から一年間に来院した患者は 145 名であった。年齢は 10 歳代が最も多くみられたが、今後障害者の高齢化も予想された。障害の種類では、自閉症、精神遅滞が多くみられたが、同時に頸髄損傷、脳血管障害などの多様化もみられた。月別延べ患者数は、ゆるやかながら増加傾向を示しており、これに対応するため、当センターの充実が必要と思われた。治療内容は、保存、補綴、外科処置など多岐に渡っており、各科協力体制が不可欠と思われた。行動調節法としては、通法が最も多く、精神鎮静法がこれに続いてきたが、全身麻酔などの専門的な全身管理が必要な症例も少なくなかった。また、今後さらに障害者歯科医療を充実するためにも、搬送システムなどの確立を早急に検討する必要があると思われた。

演題 7. Dibenzodiazepine 誘導体クロザピンの唾液分泌反応

—自律神経作働薬によるマウスの誘導唾液分泌反応に及ぼす影響—

○小川 俊子, 斉藤 弘子, 吉田 熙  
増田 義勝, 村井 繁夫

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

【目的】Dibenzodiazepine 誘導体の clozapine (CLZ) は副作用の少ない非定型抗精神病薬として期待されている。しかし、臨床において口腔乾燥あるいは流涎を引き起こすことが報告されているが、その相反する唾液分泌作用の発現機序については不明である。本研究ではこの点を明らかにするため催唾剤として各種の自律神経作働薬 (pirocarpine, phenylephrine, isoproterenol, dopamine) を用いて、マウスの唾液分泌反応に及ぼす CLZ の影響について検討した。

【方法】CLZ の投与量は予備実験の結果、3, 10, 30 mg/kg とし、CLZ の単独投与や CLZ と各種催唾剤との組み合わせによる実験では、CLZ の前処置時間を 30 分とした。マウスの唾液分泌量の測定は Richter の改良法を用いて行い、ろ紙上の染みの面積は Macintosh Computer (Centris 650) に接続した Scanjet II C Scanner と NIH 画像解析ソフトを用いて測定した。

【結果および考察】CLZ (3, 10, 30 mg/kg) の単独投与は無麻酔下または麻酔下のマウスの唾液分泌反応に影響を及ぼさなかった。CLZ の前処置は pilocarpine (0.8 mg/kg, s. c.) および dopamine (10 mg/kg, s. c.) に

よる誘導唾液分泌反応を用量依存的に抑制した。Phenylephrine (5 mg/kg, s. c.) による唾液分泌反応に対しては CLZ の低用量では促進作用を示し、高用量では抑制作用を示した。Isoproterenol (0.4 mg/kg, s. c.) による唾液分泌反応に対しては CLZ の影響は認められなかった。

以上の結果は CLZ が副交感神経性唾液分泌反応に対しては抑制作用を示し、交感神経性唾液分泌反応に対しては、CLZ の用量に依存して興奮と抑制の二相性作用を引き起こすことを示している。したがって、CLZ の自律神経系に対するこのような異なった作用態度は、臨床において観察される本剤の相反する唾液分泌の発現と関連性を有することが推測される。

## 特別講演

ネットワークエチケットについて

岩本 正敏

東北学院大学工学部

電子メールは今や電話、FAX と肩を並べる通信手段として学術研究活動に広く利用されるようになってきた。また、WWW (World Wide Web)、電子会議、ネットフォン、ネットラジオ等とインターネット上でのサービスはマルチメディア化した新たな利用に期待が集まっている。インターネットの参加組織も多様化し、利用者も若年層から高齢者までと広がりを見せている。利用の拡大と同時にその利用の仕方が問題となってくる。

アタッカーによるコンピュータの不正な利用や情報の漏洩、破壊等の被害も報告されている。これに対しては、ネットワークの防火壁や情報の暗号化等、技術的な対応で多くの場合は防ぐ事ができるが、守る側と攻める側の争いに終わりはないであろう。ところで、今問題になりつつあるのは、コンテンツの問題である。WWW で公開されているコンテンツには青少年に害があるものも存在するとして、市民グループが有害ホームページのリストを作成しそれを公開する活動を行い、家庭で、学校で安心して利用できるインターネット環境の整備に努めている。

情報発信への法的な規制に関しては、インターネットには国境はなく規制が難しいのが現状であろう。規制にだけ頼るのではなく、個々の利用者の情報倫理の確立が求められる。地球的規模のインターネットは、時間、距離空間の制約を取り除き個人の活動範囲を拡大した。このことは狭い小さな空間に人類を押し込めた効果もあると考える。個の活動が短期間に世界的に影響を与えるであろう。今、インターネットに良き活動を定着させることが大切であると考えられる。それは大地に種を蒔き育てることに似ている。次世代の種が大地に落ちることを願いながら活動を続けることが大切であろう。インターネットのように可能性のある素敵な環境をどのように使えば人類の生活の質の向上につながるのか、いま我々の知恵が試されている。